心地良い陽射(ひざ)しが差し込む午後の公園。
私はベンチに腰掛け、すぐ隣には橘(たちばな)さんが座っている。
橘アサト。
高校三年生の男の子で、私に親切にしてくれる人。気怠(けだる)げで、面倒くさがりで、厄介事には関わりたくなくて――だけど、目の前に困っている人がいれば捨て置かない。
判りにくいけど、本質的にはとても優しい人。
そういう人を、私は好ましく思ってしまう。
学校帰りに偶然、彼と顔を合わせた。それから一緒にクレープの屋台に並び、公園まで移動して、ベンチに並んで一緒に買ったクレープを食べていた。
食事中は特に会話もなく、お互いに黙々と甘味(かんみ)を満喫する。会話がなくても不思議と気まずくならないのも、彼を好ましく思う要因の一つだと思う。
「甘かった……」
クレープを食べ終えた橘さんがぽつりと漏らす。言葉だけなら、甘いものが苦手なのに無理して食べた――と解釈する人が多いと思う。男性は年齢を経るにつれ、甘いものを食べなくなるというから。
しかし、今の橘さんの満ち足りたような、どこか恍惚(こうこつ)とした響きさえ含んだ口調から、事実は推して知るべし。
彼は自他共に認める甘党なのだ。
「はい。甘いものは心まで豊かにしてくれますね」
少し遅れて、私もクレープを食べ終えると、そう素直な気持ちを口にした。甘いものは疲労回復や、脳の活動を活発化させる効果があるらしい。ならば、気持ちを落ち着かせる効果もあるかもしれない。
「あー……毎日食いたい」
「それは私に毎日会いたいという、遠回しなアプローチですか？」
他意はないであろう橘さんの呟きに、私は悪戯(いたずら)っぽく返した。先のクレープ屋は互いの通学路にあるので、下校時には毎日見かける。だが、客層は女性ばかりで、男性だけで並ぶには多分に勇気が要るだろう。だから、彼がクレープを食べるには、同伴してくれる女性の存在が必須となる。そして、橘さんにはそういった関係性の女性はいない――私を除いて。
「……ツバキは時々、小学生とは思えないドキッとするような事を言うな」
「そうですか？　小学生らしい無邪気な冗談のつもりだったんですが」
苦笑気味に言う橘さんに、私は冗談めかした言葉を返す。もちろん、冗談のつもりで言

った。だけど、ほんの少しだけ、私は期待していた。

本気でそういうつもりで言ってくれたのではないかと。

そんなはずがない。私は小学五年生の子供で、高校三年生の彼からすれば、妹くらいにしか思っていないだろう事は判っている。

私だって、本気で橘さんに対して恋心がある訳ではない。きっと、自分に優しくしてくれる年上の男性に対する、ただのよくある勘違いをしているだけ。

だけど、もし仮に、橘さんから交際を申し込まれたりしたら、私は拒まないと思う。勘違いだとしても、彼を好ましく思っているのは事実だから。

「――なあ、ツバキ」

「はい？」

私の名前を呼ぶ橘さんの声のトーンの変化に、思わず返事に疑問符が付いてしまう。普段通りの低いテンションは変わらないのに、真剣な雰囲気を感じさせる声音だったから。

「ツバキと毎日会いたいって言ったら、会ってくれるか？」

「へ……？」

彼の言葉に、思考が一瞬だが停止した。言っている事は理解出来る。だが、判断が追い付かない。それはつまり、毎日クレープを食べたいから、同伴してもらうために私と会いたいという意味だろうか。それとも……。

「……それって――」

橘さんの方を向いた途端、真剣な彼の瞳に見つめられ、私は続く言葉を失った。こんな表情を見たのは初めてだ。それだけ、先の私に向けた言葉は本気という事だろう。私の冗談に対する意趣返しの可能性もあるが、そうだとしたら、役者並みの演技力だと思う。

「……」

無言でじっと見つめられ、私はもう何も言えなくなってしまう。何も考えられないし、激しく高鳴る鼓動のせいで、胸が苦しい。ただでさえテンパってしまっているのに、彼は更に私の心を乱す一言を告げた。

「――ツバキは可愛いな」

表情は真剣なまま、ほんの少し微笑を浮かべ、ゾクっとするような優しい声で。

気怠い雰囲気のせいで普段は意識しないが、橘さんは黙っていればそこそこ二枚目だ。チャラい男性にどれだけ『可愛い』と言われても不快なだけだが、彼はそういう類の事は言わない。むしろ、そういう発言をする人間を鼻で笑うタイプだろう。だからこそ、そ

んな彼に真剣な表情で『可愛い』などと言われれば、動揺するなというのは不可能というものだ。私は彼に対して、悪い印象を持っていないどころか、好ましく思っているのだから。

「……ツバキ」

「ふぇっ！？」

返事が出来ない私の態度に焦(じ)れた訳でもないのだろうが、橘(たちばな)さんの掌(てのひら)が私の頬(ほお)に触れ、やんわりと彼から顔を逸(そ)らす事を禁じられる。

お互いの顔が近い。橘さんの瞳に映っている私の表情まで判りそうな距離だ。彼は真剣な表情のまま、更に顔を近付けてくる。

「嫌だったら、振り払ってくれていい」

息遣いすら聞こえそうな距離で、橘さんはそんな事を言った。私の頬に添えられている手は、力は込められていない。彼の言う通り、振り払えるし、この距離なら頭突きでもなんでも抵抗する手段はある。

だけど、私は出来なかった。

いや、しなかった。

嫌ではなかったし、むしろこうなる事をどこかで望んでいたのだから。

無言で『いいのか？』と問うてくる彼に対し、私は瞼(まぶた)を閉じる事で返答とした。

閉ざされた視界の中、唇に訪れるであろう感触を想像しながら。

●　●　●

「……はあ。自己嫌悪で死にたくなります」

放課後の解放感が漂う校舎内を歩きながら、私はそんな事を呟いた。久々に登校した学校の最後の授業で、私は初めて居眠りをした。優等生で通っている私が授業中に居眠りをしているという事態に、教室は騒然としたらしい。『〈機獣少女〉の仕事で疲れているのだろう』と、先生は大目に見てくれたそうだが。

「リアルで自己嫌悪なんて言う小学生、初めて見たわ」

私の隣を歩いていたクラスメイトが、私の呟きにそんなコメントをした。

スミレ・ヒノカゲ。

私の在籍する五年一組の委員長で、態度こそ刺々(とげとげ)しいが、休んだ授業のノートを見せてくれたりと、何かと私を気遣ってくれている。

「別に居眠りくらいで死ななくてもいいじゃない。まあ、優等生のタカチホさんにとって

は汚点なのかもしれないけど」

言葉面(づら)だけなら嫌味っぽくも聞こえるが、同級生の私から見ても小柄で、可愛らしい容姿の彼女が言うと、小さな子供が背伸びをしている光景そのものなので、妙に微笑(ほほえ)ましく思えてしまう。

「ふふ」

「……なによ」

思わず笑いをこぼすと、ヒノカゲさんが私を見た。睨(にら)んでいるつもりなのだろうが、やはり迫力がまるで足りない。

「すみません。私も、汚点なんて言葉を同級生の口から聞くのは初めてです」

「……ふん」

私の言葉にヒノカゲさんは鼻を鳴らして、そっぽを向いてしまった。その姿は拗(す)ねた子供のようで、やはり微笑ましく映ってしまう。

ちなみに私が自己嫌悪を感じていたのは、居眠りをしてしまった事もあるが、大部分は居眠りの際に見た夢の内容の方だ。

まさか橘(たちばな)さんにキスを迫られるなんて……。

「……」

夢の内容を思い返し、思わず自分の唇に触れる。キスをしたのかどうかは覚えていない。現実で経験していない事だと、夢でも体験は出来ないのかもしれない。

「ちょっと、なに、ぼーっとしてるの。まだ寝ぼけてるんじゃない？」

「え？　あ……」

ヒノカゲさんに声をかけられ、すでに校門に到着している事に気付く。彼女とは家の方向が違うため、此処(ここ)でお別れだ。

「気をつけなさいよね。〈機獣少女〉が交通事故なんて、笑えないわ」

思い出したように挑発的な口調で言うが、それも私を気遣った上での発言だと思うと腹も立たない。むしろ、素直に言えない不器用さが可愛らしく思える。

以前はそんな風には思えなかった。ただただ、どうして素直に言えないのか疑問に思っていた。だけど、今の私はヒノカゲさんのような人種を表現する言葉を知っている。

「ヒノカゲさんはツンデレですね」

地球で知った。素直に言いたい事を言えず、攻撃的な態度になってしまう、不器用で可愛らしい人を表す言葉だ。

「？　つんでれ……何よそれ？」

ヒノカゲさんが、きょとんとした顔をして小首を傾(かし)げる。その姿は小動物のようだ。

「ヒノカゲさん、よろしければ少しお話ししていきませんか？　クレープでも食べながら」

「……あんた、買い食いは校則違反よ。委員長の私が見逃すと思ってるの？」

「バレなければ問題ありません。バレたら一緒に怒られましょう」

悪びれずにそんな事を言う私が意外だったのか、ヒノカゲさんは再びきょとんとした顔を数秒して、慌てて表情を引き締めた。

「……意外だわ。優等生のタカチホさんが、そんな事言うなんて」

でも、と彼女は言葉を続ける。

「そういうの、嫌いじゃないわ」

「では行きましょう。駅前に小さな屋台があったはずです」

ヒノカゲさんの同意が得られたところで、私達は一緒に校門を出て、同じ方向に歩き出す。こうして誰かと下校するのは、〈機獣少女〉になってからは初めてかもしれない。

ずっと他人と距離を置いて生きてきた。必要以上には関わらず、踏み込まず、それでいて孤立もしないように。

だけど、地球でやみひめさんや橘（たちばな）さんと出会って、他人と触れ合う事を知った――いや、思い出してしまった。人に餌（えさ）を与えられる事を覚えてしまった愛玩動物（ペット）が野生に戻れないのと同じように、私ももう、以前のようには過ごせない。

それがとても寂しい生き方だと判ってしまったから。

「……」

ふと、ヒノカゲさんが私を不思議そうに見ている事に気付いた。

「なんですか？」

「別に。タカチホさん、何か変わったような気がしたから」

「変、でしょうか？」

「……いいんじゃない？　私は以前のあんたよりす――」

ヒノカゲさんは何か言いかけて、慌てた様子で口を塞（ふさ）いだ。私は彼女が続けるつもりだった言葉に予想がついたが、あえて気付かないふりをした。

『『す』？』

「な、なんでもないわよ！」

「五十音を順に言っていけば判るかもしれませんね。『すあ』『すい』『すう』『すえ』『すお』『すか』す――」

「あああああああああ――ッ！？　あんた、判っててわざとやってるでしょう！？」

その通りだが、私はあくまで白（しら）を切った。そう簡単に終わらせてしまうには、もった

いない。

ヒノカゲさんをいじりつつ、ふと視線を上げると、二つの真昼の月が浮かんでいた。地球と同じ青い空。太陽が一つ世界を照らし、白い雲がいくつも流れているのは同じなのに、それは地球とは違う空。

やみひめさんはどうしているだろうか。橘（たちばな）さんと仲良くやっているだろうか。

「ちょっと、私を無視して黄昏（たそがれ）てるんじゃないわよ！　あと、つんでれってなんなのか教えなさいよ！?」

ヒノカゲさんの怒声が、しんみりした気持ちになりかけていた私の意識を揺り戻す。遠い場所で出来た友人も大事だが、今はこれから友人になれるかもしれない相手との関係が第一だろう。そう決めて、私は小柄で可愛らしくて、ついでにツンデレなクラスメイトとのコミュニケーションに全力を注ぐ事にした。

「ヒノカゲさんみたいな人の事ですよ」

「それじゃ判らないから訊（き）いてるんでしょ！?」

サイドストーリー #10

『違う空の下で（後編）』

遥か昔、錬金術というものが存在したらしい。そこから魔法・オカルト・宗教的な要素を排し、体系化されたのが現在の科学――そして化学――らしい。不確定な要素を含まず、計算や理論に基づき結果が導き出される、人類の英知。

その極致が〈機獣少女システム〉である。

かつてこの星に最強兵器として君臨した存在――機獣。そのコアを動力として稼働するMBデバイスを使い、〈カタストロ〉と戦う少女達を支援するためのシステム。

私達は公文書上では〈MBドライバー〉という表記で語られるが、テレビや雑誌などの媒体では専ら〈機獣少女〉と呼称されるので、正式名称は悲しいほどに定着していない。

だが、呼称など問題ではない。人々の生命と財産を護り、自らも生還する事こそが重要なのだから。実際、技術として完成された〈機獣少女システム〉は優秀で、〈カタストロ〉との戦いにおいて、これまで少女達に一人の死者・重傷者も出していない。

〈機獣少女〉が惑星ゼヘナの絶対的な守護者にして、人々に心の拠り所と呼ばれる所以だ。煌びやかなMBジャケットを纏い戦う少女達の姿は、現代の戦乙女とも称される。

しかし今、そんな〈機獣少女〉達の常識や矜持は打ち砕かれていた。

「〈ネーメズィ・フレッチェ〉――罪には罰を！」

私の前方にいる『魔女』が三連装のミサイル・ポッドを構え、声と共に引き金を引いた。右肩に載せた長方形の発射装置の射出口から、右から順に三発のミサイルがわずかな時間差で発射される。ミサイル一基のサイズは、ちょうど一・五リットルのペットボトルくらいだろうか。白煙の尾を引きながら目標地点に到達すると、弾頭部分のカバーが炸薬で弾け、その内部を露にした。約二十センチほどのスペースに満載されているのは、小型の榴弾。

多弾頭ミサイルだ。

弾頭部から親指サイズの榴弾が次々に地上に降り注ぐ光景は、小規模な絨毯爆撃と言ってもいい。

「……えげつないですね」

爆撃地点に倒れている数人の少女達を見て、私は素直な感想を口にした。

無論、誰一人として死んではいない。MBジャケットを纏っている間、〈機獣少女〉の身体は不可視の防護膜に守られている。MBデバイスが装着者の危険を察知すれば、他の機能をすべてカットし、防護膜の維持に全エネルギーを回したりもする。装着者保護を最優先するためだ。

ちなみに実戦であれば、それでも〈機獣少女〉が意識を失う事はないが、模擬戦ではその機能はオフにされている。身体にかかる負担が大きいため、訓練には不要とされているためだ。

「そうかな？」

と、気にした風もなく私の言葉に答えたのは、先の多弾頭ミサイルを撃った『魔女』だ。

上半身が隠れる黒い外套（マント）を纏（まと）い、黒いつば広（ひろ）のとんがり帽子を被った姿は、どう見ても魔女だろう。もっとも、魔法の箒（ほうき）や杖（ステッキ）でなく、銃火器で武装した魔女はいないだろうが。

彼女の名前はベアトリーチェ・ファフロウ。

茶色のショートカット。猫を思わせる黄玉（トパーズ）のような黄色い瞳。体格は小柄で、無邪気な表情と口調が似合う、年齢相応の十三歳といった印象を受ける。

私より二つ年上だが、〈機獣少女〉としては珍しい年齢ではない。もっとも、彼女は〈機獣少女〉とは別の存在なのだが。

「私達〈機獣少女〉は、基本的に近接戦闘に特化しているんです。飛び道具はあくまで補助（サブ）で、主力（メイン）にしている者はごくわずかです。〈カタストロ〉も、基本的には飛び道具を持っていませんから」

私達〈機獣少女〉の戦う相手は〈カタストロ〉のみ。そして、戦場は必然的に〈ジェネレーター〉が設置されてある市街地となる。周囲への被害や、効率を鑑（かんが）みた結果、〈機獣少女〉の戦術や装備は現在の形に最適化されていった。

当然、多弾頭ミサイルへの対応など教えられていない。

「だから最初の一撃で、あんなに動揺してたんだ」

ベアトリーチェさんの言った『最初の一撃』とは、模擬戦の開始早々に撃った高出力のビーム砲――〈デーア・フレッチェ〉による砲撃の事だ。この模擬戦は私とベアトリーチェさんのペアに対して、十二人がチームを組んで挑んでくる。最初に数を減らす算段だったのだろうが、まさか過半数の七人が倒れるとは予想外だったらしい。更に今の三連装ミサイルによる攻撃で、残り五人も倒れ、わずか三分足らずで相手チームは全滅してしまった。

ちなみに私は一歩も動いていないし、一度も攻撃をしていない。

かつて、人が機獣と共に戦場を駆けていた頃は、こういった武器が主流だったらしいが、私にはそんな戦場の様子が想像もつかない。この模擬戦を経験した十二人が、トラウマを抱えない事を願うばかりだが……それは難しいかもしれない。

「全員がツバキちゃんくらい強いんだと思ってたよ」

『だとしたら、模擬戦とはいえ、ツバキとベアトリーチェの二人だけにするまいよ』

朗らかに笑うベアトリーチェさんに、私のパートナーであるMBデバイスの〈カグツチ〉が答えた。普段通りの時代がかった口調の、女声を思わせる機械音声。形状も私にはお馴染みの薙刀形態。

ゼヘナに帰還してからは、私のMBコアも問題なく機能しており、赤いミニスカ和服のMBジャケットも問題なく維持出来ている。

何もかもが本来の状態に戻っていた。

「そっか。それはそうだよね」

手にしていたミサイル・ポッドをマントの中に仕舞いながら言うベアトリーチェさんに、私は苦笑した。間近で見ていても、どういう仕組みなのかまるで判らない。別の場所にある装備を取り出しているのか、なんらかの技術で圧縮しているのか、マントの中で製造されているのか……謎だらけだ。

明らかに私達の科学とは違う技術体系――それこそ魔法としか思えない。

魔女であれば魔法を使うのも道理だが、しかし、そういったものとも違うらしい。

〈エグゼキューター〉。

それが彼女のような存在の総称だそうだ。ベアトリーチェさんの姉のタオエンさん曰く、不必要な干渉はお互いのためにならないという理由で、それ以上の事は教えられていない。

彼女等は地球から私を送り届けてくれた後も、ゼヘナに滞在しており、今日はこうしてベアトリーチェさんにも模擬戦に参加してもらっていた。

当初、タオエンさんは難色を示したが、私の部屋――つまり、〈機獣少女〉の施設を利用している以上、相応の対価は支払うべきと応じてくれた。

当の本人は模擬戦には参加していないが。

『――ツバキ、聞こえる？』

まだ模擬戦終了の連絡が来ないため、どうしたものかとその場で待機していると、〈カグツチ〉を通して通信が届いた。女性の声だが、もちろん〈カグツチ〉ではない。私の所属している事務所の先輩で、今回の模擬戦の発案者でもあるカナコさんの声だ。

「はい、よく聞こえます」

『ベアトリーチェも聞こえてる？』

「聞こえてるよー」

『それは結構。本当は休憩を挟んでもう一戦やるつもりだったんだけど、どう？』

カナコさんの『どう？』というのは、休憩が必要かという意味だろう。

「私は何もしていませんので、ベアトリーチェさんさえよければ、すぐに始めても構いま

せんが」
「うん。わたしは全然問題ないよ」
『了解。じゃあ、すぐに二戦目を始めるわ。ちなみに――相手は私よ』
「え……？」
カナコさんからの通信内容に言葉を失ったのを、私達からの質問事項はないと判断したのか、彼女が模擬戦の開始を告げると、通信は切られてしまった。
「……」
「？　どうしたの、ツバキちゃん。顔色が悪いよ？」
黙り込んでしまった私を不審に思ったのか、ベアトリーチェさんが私の顔を覗（のぞ）き込むようにして訊（たず）ねてきた。
『……〈戦姫（いくさひめ）〉のお出ましだ』
「〈戦姫〉？」
私の代わりに答えた〈カグツチ〉の言葉を繰り返すベアトリーチェさんは、最初こそ大袈裟（おおげさ）だという表情をしていたが、模擬戦のフィールド内にカナコさんの姿を認めると、すぐに表情に緊張が走った。
「カナコって、あんなだったっけ……ヤバくない？」
模擬戦前にカナコさんとは顔合わせを済ませているので、ベアトリーチェさんも常態（じょうたい）の彼女を知っている。だからこそ、表情など判らないような距離であっても、カナコさんの尋常でない気配に危険を感じているのだろう。
「……ベアトリーチェさん。先ほど、〈機獣少女〉は全員が私と同じレベルだと思っていたと言いましたね」
「え？　うん、言ったけど」
「カナコさんの強さは私以上です。私達二人でも勝てないかもしれません」
「……マジ？」
「マジです」
「……」
ベアトリーチェさんの表情に、乾いた笑みが浮かぶ。
「最初から全力でいきましょう。出し惜しみはなしで」
「その方がよさそうだね……っと」
私の提案に同意すると、ベアトリーチェさんは三連装ミサイル〈ネーメズィ・フレッチェ〉を仕舞（しま）い空（あ）いていた両手に、長砲身（ロング・バレル）のライフル〈デーア・フレッチェ〉を構える。
そして、先の模擬戦と同様に先制攻撃の一撃を放つ。眩（まばゆ）い光の奔流（ほんりゅう）が、まだ指先ほど

の大きさにしか見えないカナコさんの姿を飲み込んでいく。

しかし――

「えー……」

ベアトリーチェさんが半笑い気味に声を漏らす。無理もない。〈デーア・フレッチェ〉の閃光が晴れると、何事もなかったかのようにカナコさんは歩みを進めていたのだから。

「今の直撃だよね!?」

『恐らく、〈ヤタノカガミ〉で防いだのだろう。一種のバリアだ』

ベアトリーチェさんの困惑を隠そうともしない問いに、〈カグツチ〉が答えた。少しでも私の負担を減らそうという配慮だろう。

「ならもう一発！」

『無駄だろう。過去にあのバリアで防げなかった攻撃はないと聞く』

「うー……」

「とはいえ、〈ヤタノカガミ〉で全方位を囲む事は出来ません。そして、こちらは二人です」

十八番（おはこ）の大威力砲撃を封じられ、・・・・への字口になったベアトリーチェさんに、私は新たな提案をする。

「同時攻撃で死角を突こうって事？」

「はい、コンビネーションです」

私の提案が意外だったのか、ベアトリーチェさんは少しだけきょとんとしていたが、すぐににんまりと笑みを浮かべた。

「良いね、そういうの。〈ドゥエ・スパーダ〉――顕れ（エグゼキュート）よ！」

彼女が叫ぶと、姿はそのまま、その両手に微妙に長さの違う小太刀（ショート・ブレイド）が握られていた。〈機獣少女〉の特性に合わせて、接近戦をやろうというのだろう。

「〈エグゼキューター〉って基本、個人主義だから、そういうのすごく新鮮！」

「私も、あまり他人（ひと）に合わせるのは得意ではありませんけどね」

期待たっぷりのベアトリーチェさんには悪いが、事実だ。

「大丈夫だよ、ツバキちゃんなら」

「え……？」

「なんとかなるよ！」

「……」

思いがけず太鼓判（たいこばん）を押されて戸惑うが、不思議とベアトリーチェさんの言葉は無責任に感じなかった。私を信じてくれている――その上での発言だと思えたからかもしれない。

「……ふふ。そうですね」

「ツバキちゃん？」

私の反応が予想外だったのか、ベアトリーチェさんは不思議そうな顔をする。

「やりましょう、ベアトリーチェさん。即席ですが、コンビ結成です」

「そうこなくっちゃ！」

ベアトリーチェさんが掲げた右手の小太刀（ショート・ブレイド）の刃の部分に、私は薙刀（なぎなた）形態の〈カグツチ〉の穂先を重ねた。何かで見た漫画かアニメの見様見真似（みようみまね）だが、これで合っているはずだ。

ごっこ遊びのような事をしているのが可笑（おか）しくなり、私達は顔を見合わせて笑った。カナコさんは先輩で、〈機獣少女〉としても格上だが、今日は負ける気がしなかった。

●
●
●

普段とは違った編成の模擬戦を終え、本日の訓練は終了となった。

〈機獣少女〉はMBデバイスを与えられると、いずれかの事務所に所属する事になる。訓練の義務はないが、日頃の鍛錬を怠（おこた）る事は死に繋がるので、どの事務所でも週に数回の訓練を行うのが普通とされている。

それは私が所属している〈オフィス・タカマガハラ〉も例外ではない。所属している〈機獣少女〉は二十人ほどの小さな事務所だが、評判は割りと良く、それはエースであるカナコさんに依（よ）る部分が大きい。

カナコ・T・シングウジ。

十七歳の高校二年生。

〈機獣少女〉としての経歴は五年目だと聞いている。

どちらかといえば無口で、美人特有の近寄りがたさがあるが、実際にはとても優しい人。

私と同じ児童養護施設の出身で、共に施設で暮らした時期はないが、何かと私を気にかけてくれて、〈オフィス・タカマガハラ〉に誘ってくれたのも彼女だったりする。

先輩であり、姉のようでもある存在――それがカナコさんだ。

「今日も勝てませんでした……」

事務所のある通りに面した小さな公園。そこに設置されたベンチに腰掛け、私は呟いていた。

『ふむ。これでまた連敗記録更新だな。何時（いつ）になったら白星が付けられる事か』

「仕方がないわ。ツバキは天才だけど、私だって天才だもの。互いに才能があって努力もしていれば、あとは経験の差でしかない。これは私が引退しない限り、どうしようもない

わね」

待機状態――黒い勾玉の姿で、私の胸元にネックレスのように下げられている〈カグツチ〉の言葉に答えたのは私ではない。件のカナコさんだ。私の隣に腰掛け、ただ座っているだけなのに、ポスターや絵画にしたくなる雰囲気がある。

『状況と時の運というのもあるのではないか？』

「そんな不確定要素に頼っているうちは駄目ね。状況は自分次第。運だって引き寄せればいい」

『さすがは〈オフィス・タカマガハラ〉のエース、カナコ・T・シングウジ殿だ。言う事が違う。〈戦姫〉の二つ名は伊達ではないな』

「随分と棘がある言い方ね、〈カグツチ〉」

『いやなに。慎み深い我がパートナーに代わり、せめて舌戦でくらい一矢報いてやろうという健気な心遣いだ』

「あら。それじゃあ、まるで私が図太いみたいじゃない」

『なんだ、伝わっておるではないか』

……。

空気が重い――というか、張りつめている。

〈カグツチ〉とカナコさんは仲が悪い訳ではないが、時々こうした小競り合いに発展する。相性が悪いというか、嫁と姑の関係というか……。

「あの、二人ともそれくらいに……」

『そうだな。私とした事が大人げなかった』

「そうね。私も神経過敏になっていたかもしれないわ」

『小娘の言う事にいちいち目くじらを立てるなど、実に愚かしい行為だった』

「時代錯誤なしゃべり方でキャラ付けしてるイタいデバイス相手に、狭量だったと言わざるを得ないわね」

……。

一触即発というのは、まさにこの状況を言うのだろう。私がストレスに弱い人間だったら、すでに胃が穴だらけになっていただろう緊張感に晒されている。

結局、ベアトリーチェさんと組んでカナコさんと行った模擬戦は敗北。ベアトリーチェさんは今頃、先に私の部屋に帰って、姉のタオエンさんに介抱されているだろう。そのくらい私達はカナコさんに叩きのめされた。私がこうして話せる程度に回復しているのは、カナコさんとの模擬戦が初めてじゃない分、覚悟が出来ていたためだろう。

初めてカナコさんと手合わせした時の衝撃は今でも覚えている。同じものをベアトリー

チェさんも感じたのであれば、今日は起き上がれないだろう。
そのくらいカナコさんは圧倒的だ。
〈カグツチ〉ではないが、伊達や酔狂で〈戦姫〉と呼ばれている訳ではない。
それはさておき――この空気も限界だ。主に私の精神衛生的に。

「――二人ともいい加減にしてください。私、怒りますよ？」

『……』

「……」

ぴたりと舌戦が止み、張りつめていた空気が変わる。
別の緊張感が走った気もするが、とりあえず気付かないふりをする。
『……ふむ。よそう、カナコ。我々が争ってもしょうがない』
「……そうね。やめましょう」
判ってくれたらしい。どういう訳か、私がこう言うと険悪な雰囲気が収まるので、頃合いを見ては言っているのだが……なぜだろう？　別に本気で怒るつもりなどないのに。
「それで、話って何なの？　ツバキの方から話したいなんて、珍しいわね」
カナコさんの言葉に、私は苦笑を返す。彼女の言う通り、私が誘われる事はあっても、私から積極的に他人を誘う事はなかった。それは良くしてくれるカナコさんが相手でも変わらない。
だからか、最初は驚いていたが、カナコさんはすぐに嬉しそうに応じてくれた。
「先日、私が〈カタストロ〉と共にロストした件です」
転移現象による惑星ゼヘナからの消失。再び反応が確認されるまでの約二十時間、私がこの世界にいなかった事は否定のしようがない。観測機の異常はなく、ＭＢデバイスを追跡出来なくする手段もない。何より、私がそんな事をする理由がない。
故に、地球から同行してくれたベアトリーチェさんとタオエンさん――ファフロウ姉妹の証言と能力もあり、私に対する疑いや処罰の類はなくなった。転移現象に関しては上層部から口止めもされていないため――言う必要もないし、信じてもらえないだろう――事務所内の人間には全容を話してある。小さな事務所内で、無用な不信感を抱かせないために。
「地球に行っていたんでしょう？　大変だったみたいね」
「はい。カナコさんも上層部に口添えをしてくださったんですよね。ありがとうございます」

上層部による査問会で私の身の潔白が証明されたのは、ファフロウ姉妹の存在だけでなく、カナコさんの口添えも大きい。彼女はそれだけの影響力を持っている。

任務中に姿を消すというのは、敵前逃亡や、他国と通じている可能性を疑われるという事に他ならない。どんなに華やかな存在であっても、〈機獣少女〉というのは『威力』であり『機密』だから、その扱いは厳格に行われる。今回の場合、ファフロウ姉妹の存在と、カナコさんの口添えがなければ、長期間の不自由な暮らしは免れなかっただろう。

「どういたしまして。ツバキのためだもの、当然だわ」

そう言って微笑を浮かべるカナコさんの表情は優しくて、同性の私でもドキッとするくらいに綺麗だった。

背中に流れる艶やかな黒髪。黒瑪瑙を思わせる黒い瞳。派手ではないものの、隙なく整った造作は美しく、東方大陸美人を体現している。

身長・体形共に、十代の少女の理想形で、この華奢な身体のどこから〈戦姫〉の力が出ているのか……同じ〈機獣少女〉の私でも不思議に思う。

『――ツバキよ、そろそろ本題に入ってはどうだ？』

思わず私がカナコさんに見惚れてしまっていると、咳払いでもするように〈カグツチ〉が言った。心なしか、不機嫌そうな声音だ。

「……無粋ね」

『私は気が短いのだ』

カナコさんと〈カグツチ〉が再び険悪な雰囲気になりそうだったので、私は早急に本題に入る事にした。

「お二人は、機獣の『アポトーシス』という機能をご存じですか？」

「あぽとーしす？」

『……自らの生命活動を停止させる機能だな。其方、なぜ、そのような事を知っている？一般的にはほぼ知られていないはずだ』

やはり、元は機獣である〈カグツチ〉は知っていた。しかし、私がアポトーシスを知った経緯を知らないという事は、〈カグツチ〉は大図書館での出来事を共有していない事になる。

やみひめさんと共に不可思議な空間で、クラウさんの姿をした〈カタストロ〉から、私達は真実を知らされた。〈ジェネレーター〉に組み込まれた機獣のコアからはアポトーシスが失われ、自分で自分を終わらせられない苦しみが〈カタストロ〉を呼び、それが消滅現象に繋がっている事。そして、〈ジェネレーター〉を管理している上層部の人間達は、それを知っている可能性が高い事。

あの空間で私達は私服で、〈カグツチ〉は私の手元になかったため、実際にあの空間に行った訳ではなく、感応現象で意識だけが体験した可能性は考慮していた。

『なるほどな。私の知らぬところで、そのような事が起きていたとは……』

大図書館での概要を話すと、〈カグツチ〉は複雑な心境である事がはっきりと判る口調で、そう呟くように言った。自らも元は機獣であるからこそ、〈ジェネレーター〉に組み込まれたコアに対して思うところはあるのだろうし、MBデバイスとして肝心な時にパートナーと共にいられなかった事に対して忸怩（じくじ）たるものがあるのかもしれない。

「そのアポトーシスっていうのが失われるというのは、本当なの？」

私も思っていた疑問をカナコさんが問いかけた。

『それは私には判らぬ。ただ、〈ジェネレーター〉のコアになるかどうかの説明に、そういった項目がなかった事だけは確かだ』

〈ジェネレーター〉のコアになるかどうかは、機獣の意思に委ねられている。私も詳細は知らなかったが、『同意書』――文字通りの文書ではないのだろうが――のようなものが存在するらしい。

「アポトーシスが失われる。だけど、意図的にそれを機獣に知らせていないとすれば、それは詐欺（さぎ）だわ。〈カタストロ〉はそれが原因で現れて、上の人間達はそれを知っている……」

「あくまで可能性です。知っているかもしれない、という。そもそも、〈カタストロ〉の言った事がすべて真実とも限りません」

カナコさんの声は冷静で、そこに感情的なものは感じられない。だが、それが逆に危うく感じ、私は補足した。

「でも、ツバキは信憑性（しんぴょう）は高いと思っている。だからこそゼヘナに帰ってきた。そうでしょう？」

「……はい」

カナコさんは、私がゼヘナでの暮らしに執着がなかった事を知っている。

〈機獣少女〉である事に誇りはある。生活にも特に不満はない。

だが、それは満ち足りているのと同義ではない。

私が地球に残る選択肢を選ばず、ゼヘナに帰ってきたのは、離れた事で此処（ここ）での暮らしを再認識した事もあるが、真実を知った責任があると思ったからだ。カナコさんの言ったように。

「でも、帰りたいと思ったのも本当なんです」

ゼヘナに帰れると言われた時、私の心は嬉しいと感じた。帰る事は諦（あきら）めていたし、そこまでゼヘナでの暮らしに執着はなかったはずなのに。

「こうしてカナコさんとまた会えて、私は帰ってきてよかったと思っています」

そうだ。これが私の偽らざる本心。

責任や使命感だけじゃない、私の意思。

「ツバキ……っ！」

「ふぇ！？」

急に視界がゼロになる。口も塞がれ、呼吸もままならない。引きはがそうにも、自分より体格がいい相手にぎゅっと抱き締められれば、それも叶わない。

私はカナコさんの胸元に顔を埋める格好で、正面からハグをされていた。

「カナコさん、ちょっと苦しいです……」

落ち着いてみれば、呼吸が出来ないほどではない。それでも、そんな言葉が出たのは、私なりの照れ隠しだったのかもしれない。こんな風に抱き締められるのが恥ずかしくて、だけど嬉しくて。

こんなにも自分を想ってくれる人がいた。

カナコさんもそうだし、クラスメイトのヒノカゲさんもそう。

『……カナコよ、そのくらいにしておけ。ツバキを絞め殺す気か？』

そして、ずっと一番近い場所で私を見守ってくれていた存在――〈カグツチ〉。

地球に跳ばされたのはトラブルだったが、結果的に、私は多くのものを得た。出会いと別れを経験し、多くの事を知り、気付けなかった事に気付けた。

改めて思う――帰ってきてよかったと。

●
●
●

「ごめんなさい。つい取り乱してしまったわ」

落ち着いたのか、私を放して呼吸を整えると、何事もなかったかのように普段の沈着冷静なカナコさんに戻っていた。

「……嫌じゃなかった？」

「そんな事ありません。私はカナコさんを姉のように思っていますから」

ほんの少しだけ不安げな表情になったカナコさんが可笑しくて、本心ではあるが、私もつい、らしくない事を言った。それが意外だったのか、カナコさんは一瞬、きょとんとした表情を浮かべ、

「ふふ。ツバキは可愛いわね」

と、微笑を浮かべ、優しい声で言った。

「……」

その光景に、私は既視感（デジャヴ）のようなものを感じ、言葉が出なくなった。

此処（ここ）じゃない何処（どこ）かで、カナコさんじゃない誰かに、同じような事を言われた。

表情は真剣なまま、ほんの少し微笑を浮かべ、ゾクっとするような優しい声で。

『――ツバキは可愛いな』

私の脳裏で台詞（せりふ）が再生された。

そうだ。夢で言われた。

相手は――橘（たちばな）さんだった。

橘アサト。

地球で出会った年上の男の子。

とても良くしてもらった。

淡い想いを抱いた。

だけど、もう会う事はない相手。

「……」

「ツバキ、どうしたの？」

「カナコさん、ミドルネームの『T』というのはたしか……」

「え？　私の旧姓だけど、急に何？」

カナコさんも私と同じ児童養護施設の出身。だけど私と違い、カナコさんは荒野で一人佇（たたず）んでいたところを保護された、身元不明者だったらしい。それから施設に入り、私と同じように〈機獣少女〉の適性を見出され、現在は里親がいる。シングウジというのは里親の姓だ。

「以前、自己紹介したじゃない。普段はTって略してるけど、タチバナのTよ」

カナコ・タチバナ

橘アサト。

東方大陸は惑星・地球の二ホンに似ている。それは、かつてこの星に不時着した地球の宇宙船から、多くの二ホン人が東方大陸に移り住んだためだと言われている。だから、同じ発音のファミリーネームがある事自体は不思議ではない。

しかし、これをただの偶然と呼んでしまっていいのか……。

『――カナコよ。其方（そなた）、たしか身元不明で施設に入ったのであったな？』

どうやら、〈カグツチ〉は私の胸中を察してくれたらしい。

「そうだけど……何なのよ、二人とも。何が言いたいの？」

『質問に答えるがよい。出身地や、家族の事は覚えておらぬのか？』

「それが他人にものを訊ねる態度なのかしら？」

「お願いします、カナコさん。訳はちゃんとお話ししますので」

「……まあ、ツバキがそう言うなら答えてあげるわ」

カナコさんが語ってくれた当時の話は、概要こそ知っていたが、詳細は初めて知る事が多かった。

五年前、東方大陸のとある荒野において、呆然自失状態で発見された十二歳の少女――それがカナコさんだ。言語や一般常識は備えているが、自分に関する詳細な記憶を失っていた。覚えていたのは名前と年齢、そして――

「兄がいたわ。顔も名前も思い出せないけど、大好きだった」

そう言って、カナコさんは話を終えた。

橘さんの妹さんが行方不明になった時の年齢が十二歳。三年前という話だったが、私が地球に転移して戻ってきた際、ゼヘナと地球で時間の経過に差異があった事を考えれば、二年の時間差は無視出来る。

確証は何もないが、今ある判断材料から、こういう仮定を導き出すのは自然な流れだと思う。

カナコさんは、行方不明になった橘さんの妹で、地球から転移してきたのではないか。

「さて、じゃあ聞かせてもらいましょうか。どうして急に、私の身の上話なんて訊いてきたのか」

「それは……」

どうしたものか考える。あくまで仮定であって、何の確証もない。そして、確かめる術も、地球に行く手段もない以上、カナコさんにとっては残酷な話かもしれない。

「――ん？　ごめんなさい、連絡だわ……非常招集？」

突然の連絡は携帯電話でなく、カナコさんのMBデバイスに届いていた。そして、私のMBデバイスである〈カグツチ〉にも、同様の内容が届いていた。MBデバイスを通じての連絡事項、それは即ち〈機獣少女〉絡みという事になる。

〈カタストロ〉への対応がマニュアル化された現在、〈機獣少女〉の発見・育成に力を入れている事もあり、必要十分な人数が常に確保され、過剰労働を強いられる事はない。なにせ、ほとんどが義務教育期間中の少女なのだから、勤務体制の考慮は徹底されている。

だからこそ、非常招集というのは珍しい。私に限って言えば初めてだ。

「何事かしら。とりあえず、この話は後にしましょう」

「はい。この場合、自分達の所属している事務所に行けばいいんですよね」

カナコさんが頷（うなづ）くのを確認して、私達は共に〈オフィス・タカマガハラ〉へ向かった。

非常招集という不穏な状況だが、問題を先送りに出来た事に感謝もしていた。不謹慎かもしれないが、〈機獣少女〉絡みの事件であれば、私にとってはまだ容易（たやす）い。

この時の私はそう思っていた。

END

あとがき

どうも、流遠亜沙（るとおあさ）です。

『ゾイやみ』サイドストーリー＃10をお届け致します。

初の前後編で、サイドストーリーが連続するのも初でした。ツバキというキャラクターが、ここまで大きな存在になるとは、自分でも想定外です。

そして、ここに来て新キャラ・カナコの登場です。過去作品『あなたといるから』の主人公で、スターシステムです。アサトと兄妹というのはずっと裏設定として考えてきたのですが、今回ようやく実現出来（でき）ました。「ネタバレじゃねーか！」と思われるかもしれませんが、この展開で違いましたっていうのは……ねえ？

ちなみに、劇中で〈カグツチ〉が言っている『よそう、カナコ。我々が争ってもしょうがない』という台詞は、『ウルトラマン』のメフィラス星人の有名な台詞から拝借しました。

では、よきところで謝辞を。

まずは前回に引き続きベアトリーチェ関連のチェックをしてくださったenigma9641さんに感謝を。ありがとうございます。彼女の装備にはまだギミックがあるので、お楽しみに。

そして、ここまで読んでくださった『あなた』に感謝を。ありがとうございます。

終わると言いつつ新キャラが登場したりしていますが、『終わる終わる詐欺』ではありません。本当にもうすぐ終わります。今しばらくのお付き合いをお願い致します。

２０１６／７／５　流遠亜沙

アンケートに答える

『機獣少女ゾイカルやみひめ The NOVEL XXXXXXX』小説ページに戻る